

上代語の存在型アスペクト「リ」について

— 覚書として — *

畠山 真一

1 はじめに

本研究では、上代語におけるリ形（いわゆる、完了・存続の助動詞「リ」が動詞に接続した形式）の用法について、万葉集のデータを元に考察する。

リ形は、「動詞の連用形＋存在動詞アリ」から発達したと一般に考えられており、完了・存続を表現するとされている（吉田 1993; 金水 2006）。実際、万葉集には、リ形と同義の意味を持つ「動詞の連用形＋アリ」が観察され、この分析をある程度確証している¹。

- (1) ま日長く川に向き立ちありし袖今夜まかむと

思はくの良や (2073)

(1)における「立ちあり」は、「立つ」という変化の完了・立った状態の存続」と解釈され、リ形と同じ機能を果たしていると分析できる。

万葉集に出現するリ形は、おおむね次のような用法を持っていると分析されている（野村 1994; 仁科 2009）。

- (2) a. 存在様態…岩代の野中に立てる結び松心

も解けず古思ほゆ (114)

- b. 結果存在…

(主体変化結果存在) 沫雪に降らえて咲ける梅の花君がり遣らばよそへてむかも (1641)

(客体変化結果存在) はだすすき尾花逆葺き黒木もち造れる室はよろづ万代までに (1637)

- c. 維持（主体変化結果の維持動作を表現）…²

大君は神にし座せば天雲の雷の上に廬りせるかも (235)

d. 変化結果…

(主体変化結果) 験なき物を思はずは一杯
の濁れる酒を飲むべくあるらし (238)
(客体変化結果) 月夜良み鳴くほとどぎ
ず見まく欲り我草取れり見む人もがも
(1943)

e. 進行…

(自然) 現象) 春日野に照れる夕日の外
のみに君を相見て今ぞ悔しき (3001)
(思考・感情) 現にか妹が来ませる夢にか
も我か迷へる恋の繁きに (2917)

f. 状態…

住吉の岸に向かへる淡路島あはれと君を
言はぬ日はなし

g. 繰り返し…秋萩を妻問ふ鹿こそ独り子に
子持てりといへ (1790)

h. パーフェクト…

みやびをと我は聞けるをやと貸さず我を
帰せりおそのみやびを (126)

これらの用法の中で、特に本研究において重要と

なる用法である「存在様態」、「結果存在」、「維持」
について説明する。

(2a)の「存在様態」とは、野村 (1994) が提案した
概念であり、「存在者がどのような様態で存在するか」
を表現する用法であり、古代語ではリ・タリ形を中
心に表現される。次の例を見てみよう。

(3) a. 世の中も常にしあらねばやどにある桜の

花の散れるころかも (1459, 存在)

b. 夏の野の茂みに咲ける姫百合の知らえぬ

恋は苦しきものぞ (1500, 存在様態)

(3a)は「あり」を中核とする単なる場所的存在文であ
るが、それに加えて、(3b)は、姫百合が「咲いている」
という様態を持って存在することを示している。(3b)
に例示される存在様態を、野村 (1994) は、リ形の
中核的な用法と分析している。また、彼は、存在様
態であるかどうかに判断に関しては、アル・イルに
置き換えても文意が通じ、「場所の二格」との共起が
あり、活動性を感じられない、という3点をもって、
この用法と見なしている。先の(3b)でいえば、「夏の野
の茂みに」が(存在の)場所を示しており、活動性

が感じられず、アルで置き換えても文意が通じるため存在様態用法であると判断される³⁾。

(2b)の「結果存在」に関しては、「存在」を表現するという意味では、先の「存在様態」と同じであるが、何らかの「主体・客体変化の結果」に基づく出現を意味することに重点がある用法である。仁科(2009)は、「結果存在」に先の存在様態の例も含めているが、本研究では、場所の二格を取らず出現の意味を表現していると解釈できるものをここに分類している。

「維持」に関しては、主体が有情物であり、主体変化結果の維持、特に静止状態の維持がフォーカスされたものである。例えば、次の対比を見てみよう。

- (4) a. 万代に照るべき月も雲隠り苦しきものぞ
逢はむと思へど (2025)
- b. たらつねの母が養ふ蚕の繭隠り隠れる妹
を見むよしもかも (2495)

(4a)は、「月が雲に隠れた状態で存在している」という存在様態を表現しているが、(4b)は、ある意志のもとに「隠れる」という状態が維持されていることを示している。

このような多義性を示すリ形の用法は、どのような順序で獲得されたのだろうか。言い換えれば、完了・存続の助動詞リが、存在動詞アリから確立されていく歴史的な経緯はどのようなものであったのだろうか⁴⁾。

リ形が存在動詞アリをその語源に持っていることから考えると、当然、最も早い段階で確立された用法は、存在様態および結果存在と考えられる。しかし、この議論は、経験的証拠に裏付けられておらず思弁的な推測にすぎない。

「リ形で最も早く成立した用法は存在様態および結果存在である」という推測を裏付ける経験的証拠は、存在しないのだろうか。本研究では、連体修飾節に位置する連体形のリ形を分析することによって、この推測がサポートされることを主張する。

2 リ形の偏在と存在動詞の機能

よく知られているように、万葉集においてリ形はその大部分が連体形として出現する(小路1980; 吉田1993; 野村1994; 釘貫2003)。小路(1980)を参考に、

新編日本文学全集の『万葉集』を利用した筆者の調査によれば、リ形の全用例588例の中で連体形は、424例であり、約70%が連体形であった⁵⁾。その中でも、連体修飾の機能を果たしている用例が356例あり、半数以上のリ形が体言を修飾するという機能を果たしていた⁶⁾。

では、連体修飾の機能を果たす存在動詞は、どのような特質を持つだろうか。

金水 (1982, 2006) は、連体節における存在動詞は原則的に場所名詞を伴い、修飾する名詞の指示対象が「どこにあるか」を記述するということを明らかにしている。次の現代語の例を見てみよう。

- (5) a. *いた太郎は、汗をかいていた。
- b. 自分の部屋にいた太郎は、汗をかいていた。

この文法性の対比は、金水 (1982, 2006) の主張を確証している。

このような制約は、存在動詞は、ほとんど実質的な語彙的意味を持っていないため、存在動詞のみでは、「限定」や「情報追加」といった連体節が担う機

能を果たせないことに起因すると考えられる。

この金水 (1982, 2006) の議論から、次の予想が導かれる。

- (6) リ形が存在動詞性を色濃く残しているならば、連体修飾の機能を担うリ形は、場所の二格をともなった存在様態用法が最も多く観察される。

存在動詞としての性質を失い、リ形が完全にアスペクト形式へと成長しているならば、このような予想は成立しない。実際、「動詞のテ形+存在動詞イル」から発達したと考えられるシテイル形は、存在様態用法から発達したと考えられるが (野村 1994, 2003; 福嶋 2006)、完全にアスペクト形式へと変化しており、その用例の大部分が動作の進行か変化結果であろう。存在様態と分類できるのは、シテイル形の変化結果用法の中で、特に静止状態を表現しているものであるため、用法数の点で中心的とは言にくいと予想される。

しかし、リ形が存在動詞性を残しているのならば、シテイル形と異なり、(6)が予想される。この点を次

節で見えていく。

3 体言を修飾するリ形の用法

万葉集における連体形の機能を担うリ形の全例調査を実施したところ、次のような用法分布が観察された。

- (7) a. 場所のニ+存在様態…103例（コンテ
クストから場所が確定できるものを含め
ると、113例）

● ここに「生きる世」、「里の真中に逢
へる隠妻」、なども含める。

- b. 結果存在…（主体変化結果存在） 10例…（客
体変化結果存在）…17例
c. 維持…32例
d. 変化結果…（主体変化）…44例（再帰含む）…
（客体変化）…50例
e. 進行…（思考・感情）…33例…（（自然）現象）…
26例（「にはへる」を含む）
f. 状態…25例（習慣、属性）
g. 繰り返し…3例

h. パーフェクト…3例

本研究でターゲットとなる存在様態用法をいくつか
挙例する。

- (8) a. つのさはふ磐余の山に白たへにかかれる
雲はわが大君かも (3325)
b. わがやどに盛りに咲ける梅の花散るべく
なりぬ見む人もかも (851)
c. 二上の山に隠れるほとどきす今も鳴かぬ
か君に聞かせむ (4067)

(8)に例示されるような存在様態の用法は、連体修飾
の機能を果たすリ形において、およそ30%を占めて
おり、主体変化結果と客体変化結果を合わせた変化
結果よりやや多く、最も多く観察される用法であつ
た。この観察結果は、前節で述べた予想と合致して
いる。したがって、リ形の用法が歴史的に存在様態
から派生したことが強く示唆される。

さらに、結果存在用法および維持用法も重要である。
1節で述べたように、主体結果存在用法および維
持用法は、次の意味で存在様態用法の特殊ケースと
見なすことができる。

- (9) a. 主体結果存在用法は、存在様態用法から「場所の二格」を取る」という制約が解除されたものである。

b. 維持用法は、主体が有情物とみなせる存在様態用法である。

連体修飾の機能を担うこれらの用法は、次のような実例を観察できた。

- (10) 主体結果存在…

沫雪に降らえて咲ける梅の花君がり遣らばよ

そへてむかも (1641)

- (11) 維持用法…

沖つ波来寄する荒磯をしきたへの枕とまきて

寝せる君かも (222)

これらの例を広く存在様態と見なすと、合計155例であり、連体修飾の機能を果たすリ形の約43%が存在様態関連用法ということになる。この用法の偏りは、リ形が存在様態用法から派生したことを強く示唆するものと思われる。

先に述べたように、「動詞の連用形+存在動詞アリ」からリ形が発生したとすると、存在動詞性を最も色

濃く残す存在様態用法からリ形の用法が確立していたと見なすのが自然である。本節の議論は、さらに連体修飾の機能を持つリ形の用法が存在様態関連に偏っていることを示しており、存在様態用法からリ形の用法が確立していったことを経験的にサポートしていると見なすことができる。

4 残された課題

本研究の結果は、上代語におけるリ形が存在様態用法を起点として、その用法が歴史的に確立していたことを強く示唆している。しかし、この結果からは説明しにくい用法がリ形には残されている。

1節および3節で見たように、リ形は「進行」用法を持っている。存在様態用法は、基本的に主体が静止状態にあり「動作」をしていないことを表現しており、「進行」用法とは相容れないものである。例えば、次の用例における「降れり」に「動きの進行」がないと主張することは困難であろう。

- (12) わが里に大雪降れり大原の古りにし里に降ら
まくは後 (103)

この種の用法が確立する様態に関しては、別稿に譲りたい。

註

* 本研究の一部は、2016年11月に開催された東北大学で開催された第1回「日本語と近隣言語における文法化ワークショップ」での発表を元に行っている。

1 本研究で使用する万葉集のデータはすべて、新編日本古典文学全集『万葉集(1)～(4)』から採取した。

2 福沢(1997)の言う「持続」にあたる。

3 野村(2003)も参照せよ。

4 用法の確立の歴史は、文法化研究において「文法化の経路(cline)」と呼ばれている (Bybee, Perkins, & Pagliuca 1994; Hopper & Traugott 2003)。

5 吉田(1993:22)は、「前用例の半数以上が、連体法として用いられている」と述べ、野村(1994:43)は、

約62%が連体法と述べている。用例数の異同に関しては、筆者の調査も含め、さらなるチェックが必要である。

6 この事実から、釘貫(2003)は、リ形が既存の形容詞的用法に存在動詞が組み込まれる過程において確立された助動詞であると主張している。

参考文献

- Bybee, J., Perkins, R., & Pagliuca, W. (1994). *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Language of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hopper, P. J. & Traugott, E. C. (2003). *Grammaticalization* (2nd edition). Cambridge: Cambridge University Press.
- 金水敏(1982). 「人を主語とする存在表現——天草版平家物語を中心に——」『国語と国文学』, 59 (12), 57-73.
- 金水敏(2006). 『日本語存在表現の歴史』, ひび出版.
- 釘貫亨(2003). 「奈良時代語の述語状態化標識として成立したり、タリ、ナリ」『国語学』, 54 (4), 93-81.

- 仁科明(2009). 「「存在」と「痕跡」万葉集の「り」「た
り」について」『国語と国文学』, 86 (11), 52-63.
- 野村剛史(1994). 「上代語のリ・タリについて」『国語国
文』, 63 (1), 28-51.
- 野村剛史(2003). 「存在の様態—シテイルについて—」
『国語国文』, 72 (8), 1-20.
- 福沢将樹(1997). 「タリ・リと動詞のアスペクチュアリテ
ィー」『国語学』, 191, 28-41.
- 福嶋健伸(2006). 「動詞の格体制とテイルについて—小
説のデータを用いた二格句の分析」『現代日本語文法現
象と理論のインタラクション』, pp. 99-123.
- 吉田茂晃(1993). 「「存続の助動詞」考—万葉集の
「り」について—」『萬葉』, 147, 15-27.
- 小路光(1980). 『万葉集助動詞の研究』, 明治書院.